

鉄道駅システムのソフト化について

— 鉄道事業の活性化にむけて —

研究グループ発足にあたって

Diversification of Railroad Station System
At Making a Start of Study Group

鉄道土木グループ 新島健士 (京阪電気鉄道㈱)

by Kenji Nijima

鉄道における駅および駅前広場は、鉄道システムの中にあっても主要なサブシステムの1つであり、地域・鉄道利用者・鉄道事業者3者を結ぶ重要な結接点である。この駅に着目し、駅のソフト化情報化多様化を通じて、地域および鉄道事業の活性化の方策を検討するものである。

今般、鉄道土木グループの発足に当たり、研究グループ発足の背景・研究の目的・研究のプロセスを簡単に述べたものである。

〔キーワード：鉄道、駅、システム〕

1. はじめに

昭和62年4月、公共企業体である日本国有鉄道を分割し民営化するという日本の鉄道史上最大ともいべき大変革が実施された。この変革を期して新生JR各社のみならず在来民営鉄道を含め鉄道事業の見直しと活性化にむけてさまざまな計画が論じられ施策が実施されようとしている。

鉄道事業に従事する土木技術者として最近の数年間は何らの方向をも見出せず閉塞的雰囲気にかこまれている。すなわち、交通政策として大都市圏での新線建設の必要性は充分認識されているが、資金面・採算性・環境問題、用地取得の困難さなどから一分を除いて事業化が遅々として進んでいない。このため鉄道土木の建設部門は新たな展望をもてず、既存施設の保守管理に埋没しているといっても過言ではない状態にある。

今般、建設マネジメント委員会システム開発小委員会の研究グループとしての参加のお誘いをうけ、鉄道事業の閉塞状況と再生への模索のこのときに何らかの考えを取りまとめることができれば、ということに参加を決意したしだいである。「マネジメント」と「システム」を手がかりとして、鉄道事業の活性化について研究してゆく所存である。この研究グループの発足にあたり、以下に研究テーマと研究プロセスについて簡単に述べてみる。

2. 研究テーマ

前段で述べた鉄道土木の直面している問題点として新線建設の可能性をさぐるため資金調達、採算性向上、建設コストの低減、開発利益の帰属・回収など重要で面白いテーマがたくさんあるが、本研究グループは既存の鉄道システムに着眼して鉄道事業の

活性化をはかる方向を選んだ。

鉄道は昔から土木・電気・機械を中心とした総合工学・総合技術に支えられた一つの大きなシステム産業であるといわれてきた。すなわち鉄道システムの主な構成要素は次のものがある。

- ① 線路構造物
- ② 車両
- ③ 駅および駅前広場
- ④ 信号保安・通信制御システム
- ⑤ 電力・動力設備
- ⑥ 車庫・車両基地

これらの構成要素は全て重要なサブシステムであるが、地域との関わりあいの視点からは①と③が、利用者の視点からは②と③が取り上げねばならない。すなわち、一般の鉄道利用者は鉄道との関係は駅に始まり駅に終わることとなる。また鉄道事業者にとっても駅は企業の顔であり姿勢であり心であるとともに、交通の結接点であり人々の集積点である駅の利点を生かした新しい事業展開の場ともなるべき重要な拠点でもある。

一方、社会環境の変化は激しく、もう既に高齢化・国際化・高度情報化社会に入りつつある。また意識の多様化・価値観の変化など人々の意識も大きく変化してきている。この変化の時代に、鉄道システムのサブシステムの一つである駅を分析し新しい駅のあるべき姿を構築したい。そこに描かれる姿は単に電車に乗るためにだけ利用するのではなく、駅に行けば楽しいことが待っている、新しい情報が手にはいる、そこはまさに、都市のあるいは地域の中心となっているであろう。

地域にとっては中心として、核として、シンボルとしての駅。利用者にとっては交通機能に加えて情報・楽しさ・交流の場としての駅。鉄道事業者にとっては事業展開の根拠地であり常に新しい活動の場としての駅。

鉄道土木の技術者として今までのハード面からの取り組みだけでなくソフトの視野からあえてチャレンジすべく、「鉄道駅システムのソフト化について—— 鉄道事業の活性化にむけて ——」をテーマ

にして研究をはじめた。

3. 研究のプロセス

研究のプロセスは、現在次のように考えている。

Step 1. 現状分析

概念の共有
資料の収集整理分析
既存駅の現状分析
駅の設計の考え方
駅改良事例の検討

Step 2. 問題点の抽出

既存駅・駅周辺の問題点
設計の考え方の解体と再構築

Step 3. 将来の駅のあり方 —— 新しい駅のあるべき姿 ——

地域との関連
利用者との関連
鉄道事業者としてのとらえ方

Step 4. ケーススタディー

大規模駅（都心ターミナル駅等）
中規模駅（沿線中核駅、乗換駅等）
小規模駅（都市内の忘れられた駅、ローカル駅、観光地駅、その他）

Step 1 の段階では、研究グループ構成員の問題意識と言葉の持つ概念の共有化を図る。構成員それぞれの組織・経歴・立場の違いをふまえながら研究の目的・問題点の確認を行うとともに、「マネジメント」「システム」「ソフト」等幅広い用語の概念を共有するために数回にわたるフリーディスカッションを実施してゆきたい。

またそれと並行して、各社から都心ターミナル駅沿線中核駅ローカル駅等、駅の類型別に数例をピックアップし、地域の立場・利用者の立場・鉄道事業者の立場から見た駅の現状を調査分析を行うとともに

——駅で電車も乗れません——

概念



に各社における駅の改良事例を検討し、改良計画を通してえき設計の理念・考え方の所在を確認してみたい。

Step 2 の段階では、1 での検討をふまえ、個々の駅・改良事例の問題点を整理するとともに、その根本に横たわる設計の考え方を一度分解し、再構築を試みたい。

Step 3、4 の段階は現時点では具体的な検討方法を提示できないが、本研究グループは実務担当者を中心としており、基本の理念に関する検討は大切であるが、より以上に現実に即した研究を行い、最終目標としてはモデル駅を設定しケーススタディーを実施してゆく所存である。

研究の一端として、メンバーより提示された、駅のソフト化と地域のかかわりについて、別紙の概念図を得たので添付する。

4. おわりに

本研究グループは数回の準備会を経て本年10月に発足した。現在、Step 1 の前段として駅の現状調査、各社の駅設計の基準・理念等調査と定例会議時のフリーディスカッションを始めている段階である。

現段階でこのような発表の機会を与えられたことは誠に光栄であるとともに、責任の重大さを痛感している。

本研究グループは現在下記の9名にて構成されている。(昭和62年11月現在)

伊藤篤志 (近畿日本鉄道㈱)

坂本保彦 (西日本旅客鉄道㈱)

田中利秋 (南海電気鉄道㈱)

東条 満 (近畿日本鉄道㈱)

○新島健士 (京阪電気鉄道㈱)

畠中征三 (阪急電鉄㈱)

坂東真一 (阪神電気鉄道㈱)

平田雄三 (阪急電鉄㈱)

松村修一 (京阪電気鉄道㈱)

○印：グループ主査

本研究グループは鉄道土木技術者だけで構成されている。これは、メンバー間の相互理解が早い反面新しい発想が生じ難くなる恐れがある。研究がある程度進んだ段階で、職域や発想の異なった人達に参加していただき指導助言をいただくとともに、皆様からの率直な意見批判をいただければ幸いです

最後に、本研究グループの発足に際し、終始御指導いただきました京都大学春名攻助教授に感謝の意を表します。

参考文献

亀田弘行他：新鉄道システム工学、山海堂 1984